

# 小田桐 孫一（おだぎり・まごいち）

## 1、プロフィール

教育者。文芸春秋社を辞して帰郷、以後子弟の教育に専念。弘前実業・弘前高校長を歴任。その間職場同人誌「なるしす」「鏡陵」、俳誌「渋柿」を創刊、自ら健筆を揮った。

<生没>

1911(明治 44)年9月 16 日 ~ 1982(昭和 57)年7月 18 日

<代表作>

随筆集『石の言葉』『風塵抄』『草沢の心』『鶏肋抄』

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。郷里の子弟の教育に情熱を傾け、弘前市立実業高校長、弘前高校長、藤崎町教育長を務めた。

## 2、作家解説

旧制弘前中学校4年修了で旧制弘前高等学校に進学。同期に小高根二郎、一年上に上田重彦、津島修治(太宰治)がいた。東京大学卒業の翌年、昭和 12 年文芸春秋社に入社。特派員として満州に赴くなどしたが、19 年帰郷を決意、弘前中学校の嘱託教授、のち教諭となる。10 月、召集される。24 年、シベリア抑留から復員、新制弘前高等学校教諭となる。これより「ダモイ」があだ名となる。

35 年、弘前市立弘前実業高校初代校長となり、職場同人誌「なるしす」を創刊。随筆集『石の言葉』(39 年)、『風塵抄』(41 年)を発行。

45 年、弘前高等学校長。ここでも同人誌「鏡陵」、俳誌「渋柿」を創刊。自らも短歌は草雨、俳句は小雅堂・壺木、ペンネーム真木公平で健筆を揮った。

47 年、教職を辞し『鶏肋抄』を上梓。52 年、藤崎町教育長となる。57 年永眠。「渋柿園」9月号、「道標」12月号、58 年「鏡陵」が追悼号を組んだ。

### 3、資料紹介

○随筆集『鶏肋抄』

図書

1972(昭和 47)年 10 月 6日

210mm×155mm

弘前高校長として在任中に行なった、入学式や卒業式の式辞などを集めたもの。子供たちに後事を託す真情があふれている。「人間のうた」「照于一隅」「最後の授業」などを主たる内容とし文明からの自然・人間性の回復を訴え感動的である。